J-37

# 東京における金魚養殖業の発展に関する研究 -東京都江戸川区を対象として-

Study on the development of goldfish aquaculture in Tokyo
As the target of the Edogawa-ku, Tokyo

○大槻愛¹,畔柳昭雄²,菅原遼³ \*Ai Otsuki¹,Akio Kuroyanagi²,Ryo Sugahara³

Abstract: There is also a summer tradition of Japan, but familiar goldfish like Goldfish, goldfish hometown in China. The goldfish is in Japan has been left as a culture. In this study, to study expansion of Edogawa-ku, Tokyo of fish farms is the three major producer of goldfish. Showa starts from 30 years, with the current under the influence of urbanization and residential land of around but Edogawa tended to increase until 1933 is a reality that has been reduced to two hotels. The present study aims to study the development and current state of the fish farm of Edogawa.

#### 1. はじめに

我が国の夏の風物詩となっている金魚は、室町時代中頃に中国から大阪・堺に伝来してきた. 当時は非常に高価で、大名や貴族などの特権階級のみに広がったが、江戸時代中期から武士が副業として金魚の養殖を始めたことを契機に庶民にも愛玩魚として広く普及した. 現在我が国で養殖されている金魚は、およそ25種類を数え、品種改良が容易なこともあり、美しさや優雅さを極めることに注力がなされている.

こうした金魚の三大産地としては、奈良県郡山市、愛知県弥富市、東京都江戸川区が挙げられる。その中でも、東京都江戸川区では、隆盛期となる大正末期から昭和初期にかけて、20 軒以上の金魚の養魚場が存在した。しかし、都市化に伴う宅地化の影響により、現在では2 軒にまで減少した。

そこで本研究は、江戸川区における金魚の養魚場の 変遷とその現状を明らかにすることを目的とする.

#### 2. 調査概要

Figure1 に調査対象地, Table1 に調査概要を示す. 本研究では明治 30 年からの現在までの江戸川区の養魚場の数及び場所について文献調査を行い,金魚の養魚場の発展を把握した. 次いで,現在も金魚養殖業を営む堀口養魚場に対してヒアリング調査及び文献調査を行い,養魚場の飼育水の使われ方,歴史,利用者,現状について把握した.

# 3. 江戸川区における金魚養魚場の変遷 Figure2 に江戸川区の金魚の養魚場の軒数の推移を

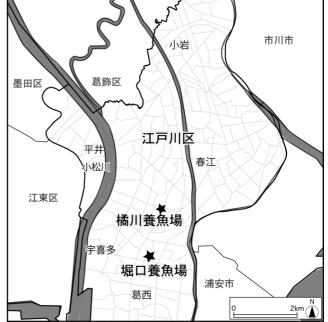


Figure 1. Distribution of fish farms in Edogawa

項目	調査概要
調査対象地	東京都江戸川区
調査日	平成 28 年8月24日~9月31日(41日間)
調査方法	区史・報告所・Webサイトによる文献調査,ヒアリング調査
文献調査項目	社会背景,養魚場の数の変遷,場所の確認
ヒアリング対象	堀口養魚場
ヒアリング内容	養魚場の現状

Table 1. Outline of the study

示す. 次いで大正12年の関東大震災以降は,水源豊富な場所を求め江戸川区の金魚養殖業はさらに盛んになり,特に昭和15年には年間5000万尾の金魚が生産され,海外にも輸出を行うまでに栄えた.

一方で太平洋戦争中は、食糧難に伴い金魚の養魚場

1:日大理工・院(前)・海建 Graduate School ,Nihon-U.

2:日大理工・教員・海建 Prof, CST, Nihon-U., Dr. Eng

3: 日大理工・教員・海建 Associate Prof, CST, Nihon-U., M. Eng.

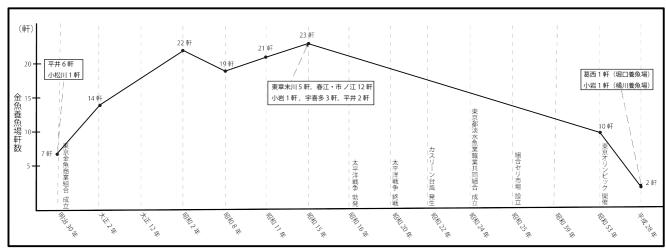


Figure 2. Deployment of goldfish farming Edogawa

は、食用鯉の種苗生産や養殖池の耕地などへの転用等が強いられた. 戦後、江戸川区の金魚の営業が再開されたが昭和22年のカスリーン台風の被害を受け、池で養殖していた金魚がほぼ全滅に陥る被害を受けた.

昭和24年には、東京都淡水魚養殖漁業協同組合が設立され、25年には船堀に現在の組合セリ市場が完成、29年には東京の金魚生産業者の2/3が江戸川区において営業を行っており、最盛期の昭和23年の生産量は5000万尾を数えた.しかし、昭和47年にはその1/3以下である1500万尾にまで減少し、昭和53年頃には最盛期に20軒あった養魚場は10軒にまで減少した.現在では、堀口養魚場と橘川養魚場の2軒を残すのみとなっている.

### 4. 堀口養魚場の現状

現在,東京都江戸川区で営業している堀口養魚場を対象に、ヒアリング調査を実施した.

堀口養魚場では東京オリンピックが開催される昭和 39 年まで川の水を使用し養殖を行っていたが、昭和 53 年の東京オリンピック開催を契機に、都市化や工業化が進み、河川の水質汚濁の進行に伴い、その使用が困難となった。現在の養殖水は井戸水と水道水を利用している。水道水を使用する場合は、カルキ抜きを行う「ため池」が必要であり、堀口養魚場のため池では一度に 0.5~1.5 トンもの水量を必要とする。一般的なカルキ抜きは薬剤を使用するが、同養魚場においては、ため池の底に土があるため不要となる。近年では井戸水の利用に規制がかけられているため、水の確保が困難となっている。

江戸川区の養魚場の多くは都市化の波に押され、地 価の高騰による固定資産税の上昇などにより、養殖業 者は転業や郊外に養殖池のみを移転せざるを得なくな っている.

しかし市場に卸された堀口養魚場の金魚は、金魚愛 好家や地域住民など多くの人々に親しまれている.

## 5. おわりに

本研究では、東京都江戸川区における金魚養魚場の発展について捉えた。江戸川区では、東京金魚商業組合が設立された明治30年に、金魚の養魚場が小岩に6軒、小松川に1軒の計7軒が現江東区域から移転してきたことが金魚の養魚場の始まりとされている。明治末頃になると本所や深川から徐々に移転してきたと伝えられており、金魚を含む水産養殖の主産地として、葛西、篠崎、小岩があげられる。しかし、昭和8年まで増加傾向にあった養魚場も現在は、2軒にまで減少している。

本研究を踏まえ、今後は養魚場で使われていた水利 用についてさらに詳しく調査し、河川と養魚場の関係 性について検討していく必要がある.

## 参考文献

- 1) 江戸川区史:3巻,第1章 産業と経済,四金魚と鯉, 金魚及び鯉類の養殖,p.136~141, 2014.4.1
- 第9回東京市統計年鑑:第7章 農林・畜産・水産 業第 第34 水産養殖, p.564~565, 1936 年
- 3)金魚と日本人、鈴木克美、1997.11.22
- 4)組織的調査研究活動推進事業報告書 東京都水産試 験場, 1985.3
- 5)はじめて金魚と暮らす人の本、松沢陽士、2011.76)金魚の医・食・住、川田陽之助、2007.57)江戸川区ホームページ